第五回台湾李登輝学校研修団レポート

李登輝校長ご健在、「安倍日本に期待」と熱弁！

李登輝学校日本校友会理事長　片木（かたぎ）　裕一（ゆういち）

黄昭堂（右）、黄天麟の両先生（９月４日）

第五回台湾李登輝学校研修団（宇井肇団長、酒井旭副団長）は、予定どおり九月二日から五日まで開催し、今回は四十一人の参加となりました。いつもながら全国各地から集合、台湾在住の方の参加もあり、地域色豊かです。

【初日・九月二日】

二日、台北・桃園空港第二ターミナルに集合した一同は、一路龍潭の渇望学習センターに向かいます。第三回、第四回では野外研修が先でしたが、今回は原点に戻って？　集中講義からとなったからです。バスは一時間ほどで渇望学習センターに到着、チェックイン後に始業式、と思いきやこれも原点に立ち戻って？　荘孟学・教育処処長による「阿輝伯（アフィベア）」の練習です。

続いて始業式は、黄昆輝教頭から開校のご挨拶と、群策会の教育方針等をお話しいただきました。そして小休止の後、最初の講義。そう、今回は従来より短い三泊四日なので、スケジュールはビッシリ詰まっているのです。

講義は「台湾と日本の安全保障」（台湾独立建国聯盟主席・黄昭堂先生）です。黄先生はいきなり「対米依存が嫌なら、日本は核武装するしかない」と切り出し、「もし日本に米軍基地があるのが嫌なら米軍は台湾に来てもらいたい」と、昨今の日本の政治家の核発言を先取りです。最後に、現在の台湾の武器購入が遅々として進まない状況を説明いただきました。

夕食後は簡単な座談会、これにて初日は終了となりました。

【二日目・九月三日】

この日最初の講義は「李登輝先生と台湾の民主化」（国史館館長・張炎憲先生）です。張先生は黄昭堂先生とともに第一回から講義され、正に「レギュラー講師」です。講義題目も同じですので講義スタイルを毎回工夫されていますが、今回はさらに一新、台湾の民主化を「日本統治とそれ以前」、「二二八事件」、「蔣介石・経国統治」、「李登輝総統就任以降」の四段階に区切り、各ステップでの重要な事柄を説明いただきました（６頁参照）。

さて、渇望学習センター最初の昼食です。従来、種類も量も多く残り気味だったので、前回の研修団終了後「少し減らした方が……」と提案していたのですが、今回ご配慮いただいたようで、種類はそのままで量を若干セーブしていただいたようです。

昼食後最初の講義は「台湾の歴史」（台湾大学助教授・呉密察先生）です。第三回目から登壇された呉密察先生は回を重ねる毎に講義の内容充実、進行円滑になり、今回は「絶好調」。

前回同様、一六世紀から現在に至る台湾の歴史を大まかに説明されましたが、続いて「二〇〇〇年に民進党が政権を奪取したが、なかなか成果はあがらない。今一度、民主主義・ナショナリズムを整理・再集結して再スタートとなるだろう」と論じ、「中国国民党は別として、台湾は日本を糾弾することはないだろう。台湾人は日本と友人関係でありたいと考える。中国人はそうではない」と締めくくられました。

ここで休憩、いつものとおり飲茶ありの立派なもので、ここでついつい食べ過ぎる？　から夕食が残るのだ、ということで、今回はこちらも量的には控えめにしたのですが……。

次の講義は「台湾の主体性の追及」（中央研究院・林明徳先生）です。前回同様、台湾は中国の一部説の根拠であるカイロ宣言やポツダム宣言はただのコミュニケで、正規の国際法はサンフランシスコ平和条約であること、台湾人の祖先の多くは大陸からの移民ではあるが原住民との混血であり、中国人とは別民族等と説明。今回はさらに「我々は中国人とは違う。中国はSARSや鳥インフルエンザの発源」「法は日替わり、ワイロは花盛り」「千島湖事件が中国人の本質だ」「（過去の）我々は、韓国のナショナリズムを少しは見習うべきだった」等、大胆な発言もあり、睡魔は取り付くスキがありません。台湾の主体性とは台湾の独立であり、正名・制憲は台湾アイデンティティにより可能で、当面の課題である、と締めくくられました。

夕食後の講義は「台湾の文化・文学」（真理大学教授・張良澤先生）です。張先生は前回「日本時代の台湾人の生活」と題し、当時台南で開業医だった呉新栄さんの日本語日記を題材にした講義でしたが、今回は劉銘伝（清時代、台湾のインフラを手がけた）や

黄昆輝先生、９月２日

黄昭堂先生、９月２日

張炎憲先生、９月３日

呉密察先生、９月３日

朱舜水（晩年水戸に住み、水戸光圀にラーメンを紹介した）から始まり近年の作家の話、それも本人の面識ある人物が題材なので、飽きることなく楽しく受講することができました。

これでこの日の講義は終了です。なお玄関脇の喫煙所、通称「渇望煙草センター」は今回も健在、休憩の際には必ず数人集まっていました。

【三日目・九月四日】

この日は野外研修です。八時半、渇望学習センターを出発、最初の見学地の総統府には十時前に到着。案内は第二回からスタッフに加わった李清興さんで、松江路にある勝美旅行社の社長です。総統府に入る前、李さんと「解説が『あの方』だったら大変ですね」などと言っていたら、入り口で我々を出迎えたのが蕭錦文（しょうきんぶん）さん、「あの方」です。何が大変かと言うと、親切丁寧、自身の体験まで話されるため、時間の調節が難しいのです。蕭さんは台北の二二八紀念館でも解説をされていますので、皆さんは「時間無制限」でお尋ねいただければと思います。研修団では時間が短すぎるので。

総統府の次は台湾博物館ですが、月曜は休館なので入口で解説を伺いました。向いの土地銀行、近くの中山堂を見学し、バスに乗車。車窓から紅楼も見学したのですが、見えたのはほんの一瞬だったので見落とした方も……。

昼食は恒例の鼎泰豊。今回はご存じ信義路店ではなく忠孝東路店ですが、やはり長蛇の列（多くは日本人）。食事が終わるころに雨が降り出し、三〇分ほどの自由時間は喫茶店で雨宿り。

その後バスに乗り、日本時代建築の監察院、教育部（旧中央研究所）、台湾大学医学部、公売局（旧専売局）を回り、師範大学（旧台北高等学校、李登輝校長先生の母校）では校内を見学します。そして本日最後の訪問地である新店川の上流の水力発電所に向かいます。初代は「亀山発電所」、日本時代の一九〇五年に台湾初の水力発電所として完成したもの。しかし今回見学したのは一九三八年に造られ、当時の発電機が今も健在という桂山発電所です（初代の亀山発電所はこの発電所の完成により廃止された）。

なお、ご案内いただいた温振華先生は実は原住民研究が専門で、バスがUターンする場所を捜すべく一旦発電所を通り過ぎて烏来（ウライ）にさしかかった際、「本当はこのままタイヤル村へ行きたいんだけれどね」とのことでした。

これにて野外研修は終了、渇望学習センターに帰還します。

夕食後、黄昭堂先生と前総統府国策顧問で元第一銀行理事長の黄天麟先生による討論会です。黄天麟先生は研修団初登場、「小さい経済体と大きい経済体が親密になると、大きい経済体に呑み込まれる」という周辺化理論を解説、現在の対中国貿易の拡大に警鐘を鳴らし、黄昭堂先生は「中国は強大になっては困るが、崩壊しても困る」と

問題の深刻さを話されました。

【四日目・九月五日】

最終日、この日は李登輝校長の特別講義と終業式です。李登輝校長は春以降、体調不良が伝えられ心配していたのですが、登壇された校長先生は大変お元気そうでした。

冒頭、安倍首相の『美しい国へ』を手にとり「政治家の著書というものは概して漠然としたものが多いが、この本はかなり具体的に書かれている。特に第七章で教育関係について書かれている。是非読んでください」と安倍日本への期待を述べられ、さらに台湾における日本教育、若き日の体験、武士道、日本精神……とても一時間半とは思えない濃密なものになりました。

続いて修業式です。今回も修業証書の授与式では李登輝校長自ら参加者全員に手渡されました。緊張します。続いて「仰げば尊し」を奉唱、これにて研修は全て終了しました。

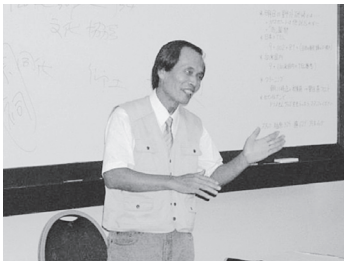
この後、昼食会。李登輝校長は前回欠席されたのですが、今回は同席、多くの方々と談笑され、食事もシッカリ採られました。隣の一角には二十歳前後の台湾人グループ（企業の研修だったらしい）がいたのですが、「あッ、李登輝さんだ、周りは日本人だ」ということで、携帯をかけたり写真を撮ったりと大騒ぎ。揺れる台湾において李登輝先生は「過去の人」ではなく、現在も重要な位置におられることを痛感することとなりました。

筆者も機会をいただいたので台湾版新幹線のことを伺いましたが、当方が多少事情を理解していることが分かると、ポンポンポンと問題点を指摘されたのには圧倒されました。この方、本当に八十三歳なんでしょうか⁉

最後になりましたが、今回も研修団の出発前に茶話会を開いていただいた許世楷駐日大使はじめ代表処の方々、李登輝学校のスタッフには感謝！

なお、台湾スタッフの中に岐阜大学に留学中の黄慈婷さんがいました。若い世代の日台交流を促進するのも我々の役目と思います。

林明徳先生、９月３日



張良澤先生、９月３日

阿輝伯練習、９月４日

李登輝先生、９月５日